書　評

Margaret Willson, *Seawomen of Iceland: Survival on the Edge*, University of Washington Press 2016

松　本　　涼

1．はじめに

北大西洋の孤島アイスランドでは船は身近な交通手段であり、海獣猟を含む漁は長きにわたって島民の生活を支える重要な生業だった。2000年代以降も漁業は国の基幹産業のひとつであり、以前より減ってはいるが、海産物は海外輸出額の20％前後を占めている[1]。しかし、そのようなアイスランドにおいても海や船はまず男の世界とイメージされ、女性と海との関わりについてはほとんど知られていなかった。本書は、その隠された「海の女」[2]、すなわち女性の漁師や船乗りの歴史に光を当てたものである。

著者マーガレット・ウィルソンはアメリカ出身の人類学者であり、現在はワシントン大学の客員准教授を務める。彼女はアイスランド西南部の漁村ストックセイリに住む友人を訪ねたとき、スリーズル船長（Þuríður formaður Einarsdóttir, 1777－1863年）のことを知る。スリーズルは優れた船長として漁船を指揮し、地元では有名な女性だった。ウィルソン自身も漁船で甲板員として働いた経験があったことから女性の船乗りというテーマに関心をもち、５年以上の調査研究を経て世に出されたのが本書である。

アイスランドにおいて、1998年から2011年に自身のフルタイムの職を漁業と答えた女性の数は約200から900人の間で推移し、商業的漁業人口の内６－10％を占める[3]。ヨーロッパの漁業国でも1990年代の平均が3.1％ということを考えると、現代でもアイスランドでは女性の船乗りが多いといえる。18－19世紀にはもっと多かったにもかかわらず、女性の船乗りの存在はほとんど注目を集めることがなかった。世界経済フォーラムによるジェンダーギャップ指数で10年以上連続首位を保つジェンダー平等先進国であり、漁業も盛んなこの国で、なぜ彼女たちの歴史は語られないのか。この疑問を出発点として、ウィルソン氏の「海の女」を探し出す旅が始まる。

2．内容紹介：海に出た女性の1100年史

本書はアイスランドの歴史の始まりから現代までの海の女性の歴史をたどるため、資料も多岐にわたる。主に前近代については文献調査、20世紀以降についてはインタビューの比重が大きい。文献調査は中世に書かれた歴史物語サガから近世の行政文書や裁判記録、海難事故の記録、住民の日記や外国人が残した旅行記、近代以降は新聞などが対象である。インタビューは1940年代から2013年までに海で働いたことのある150人以上のアイスランド人女性や、女性を雇ったことのある男性の船長や船員に対して行われた。本書は学術研究の成果であると同時に、彼ら・彼女らの生きた声や著者自身の体験談もふんだんに含み、読み物としてもおもしろい。

第１章・第２章では、近世までの漁業を取り巻く環境が考察の対象となる。アイスランドは870－930年頃のノルウェー系ヴァイキングの無人島への植民によって始まった社会だが、1262－64年には故地ノルウェーの王の支配を受け入れる。その後、1380年のノルウェー＝デンマーク同君連合によって実質的にデンマーク王の支配下に入るが、ここではとくにデンマーク統治下の近世において漁業が生存のために重要性を増したと主張さ

れる。

アイスランドの近世を特徴付けるのは環境の厳しさである。とくに1700年代以降の気候の寒冷化、それにともなう飢饉、1707－８年の天然痘の流行（人口の４分の１が減少）がアイスランドにおける生存を困難にしていった。さらに、17世紀にはデンマーク王による独占貿易（1602－1786年）が開始され、アイスランドとの取引は原則としてコペンハーゲンの商人のみに許可されることになった。著者はこのような自然環境の変化と人為的な政策がアイスランド内で労働人口と物資の不足を招いたため、男女を問わず農場の使用人は漁に出て食料を獲得するのが「ふつう」だったと考える。

とくにこの部分は豊富な女性漁師の事例を通じて、前近代のアイスランドでどのように漁が行われていたかも明らかにする優れた民族誌的記述にもなっている。たとえば、漁船は多くは甲板のない手漕ぎボートであり、中世までは16オールほどの大きさだったものが、18世紀にはおそらく人手不足から４－６オールに小型化した。また漁に出るには特別な服装も必要だった。とくに牛皮や羊皮のコートは極寒の海に出る上で必須で、このコートを与えることが農場の使用人や子どもに対して漁を許可する意味も持った。このコートの下に羊毛のセーターを着込み、羊毛の手袋や靴下で防寒対策をし、男性はさらに皮のズボンを穿くが、多くの女性は羊毛のスカートを二重にしていた。スカートは水に濡れると重くなり、海難事故の際には命の危険を招くこともあった。女性がズボンを穿く場合もあり、本書の研究の出発点となったスリーズル船長は陸でも海でも皮のコート、縁のある帽子、ズボンという出で立ちをしていた。しかしそれは例外的で、女性は不便でもスカートを穿いていた。その背景には、18－19世紀には女性がズボンを穿くにはデンマークの行政官から許可証を購入する必要があったという事情もある。スリーズルはズボンを穿く許可を得る代わりに行政官の業務に協力しており、鋭い洞察力で窃盗事件を解決した話も伝わっている。彼女は海でも陸でもリーダーシップを発揮したが、唯一の例ではなく、18世紀半ばの西部で女性のみを乗組員として漁をしていたハルドウラのように、いくつかの類似の例が挙げられている。

また、アイスランドの漁業基地は通常４つに分類されるが[4]、útverと呼ばれる農場から離れた基地を拠点とする漁は主に男性の仕事で、女性はheimaver、つまり農場の近くでの日常的な漁に従事するという男女の役割分担があった。しかし、１－５月の魚群が訪れる季節に農場から離れた漁業基地へ出かけ、数ヶ月間キャンプをして沖合の漁に専念するútverは、通常の農場での仕事よりも報酬が高く、また農場主の管理から離れて自由に振る舞えることもあり、女性も機会があるかぎりútverに参加しようとした。この背景には、1720年の法によって、特定の「男の仕事」（乾し草刈り、泥炭の採取、漁）を果たした場合には女性にも同等の賃金を支払うよう定められていたことがある。さらに、オヒョウなどの希少な魚を捕獲すると追加の報酬も得られた。

また、女性が漁に従事するきっかけは、子供の頃から父親とともに漁に出ていたことにある場合が多い。1900年以前の多くの女性には、亡くなった夫の代わりに仕事を引き継ぐ場合もあるが、多くは未婚で子供も少ないという傾向がみられる。漁に関わる女性の多くが農場の使用人で、そもそも結婚する機会がなかったという事情がまず考えられるが、スリーズルのように船長を務め、使用人層ではない女性でも結婚せず、子供もいないか少数であることが多い。これは晩年、漁に出られなくなった女性が困窮する要因にもなっている。

このように豊富な証言が残されており、18－19世紀には海に出る女性は珍しくなかった。とくに漁業に適した西部、南部では多くの女性が男性とともに漁に出ており、船長として船を指揮する場合もあった。しかしその歴史は現在ほとんど語られることがない。それはなぜか。

その答えは主に第３章で提示される。19世紀には漁船の技術的な発展に加え、デンマークによる独占貿易も緩和された結果、とくにスペインとイングランドとの貿易が増大した。漁獲量と輸出量が全体的に拡大した結果、海と陸との分業が生まれ、海で魚を獲ることは男性の仕事、陸で魚の加工をすることは女性や子供の仕事とみなされるようになっていった。

同時に、社会全体の近代化と都市化が進んだ結

果、海外（とくにイギリス）からもたらされた男性は外の仕事、女性は男性が帰るべき「家」の仕事に従事すべきという性別役割分担の考えがアイスランドにも浸透し始める。その結果、1870年代から海に出る女性への評価は下がり、女性には船の仕事をする能力がない、海に出る女性は女らしくない、良き妻・良き母ではないと非難されるようになった。このような外来の価値観は女性が船に乗ると魚が逃げるという迷信ももたらした。アイスランドでは中世以来、超自然的な力によって魚を寄せ付ける能力が備わっている人物がいると信じられており、fiskinやveiðinと呼ばれていた。fiskinは男女ともに存在し、女性が船に乗ることを厭わない19世紀以前のアイスランドの習慣につながっていたと考えられる。このような産業構造や価値観の転換を経て、1900年代に入ると女性の漁師・船乗りの数は減少し、歴史としても語られなくなっていく。

第４章から第６章は20世紀の女性船乗りが対象となる。周囲の反対が強まる中で、なぜそれでも女性たちは海に出たのか。まず挙げられるのは経済的理由である。魚の加工などの陸上の仕事においては賃金の男女格差が激しく、海に出て漁に従事する方が報酬が良かった。また1990年代まで、首都レイキャヴィーク以外の地方社会では、女性にはほかに給与の高い職に就くチャンスが乏しかった。1720年から続く法が生きており、船の仕事では女性も男性と同じ報酬を得られたため、貧しい地域では家族を養うため、もしくはより良い暮らしをするためにほかに選択肢がなかったのである。

ただ1970－80年代になると、フェミニズムの高まりから女性船乗りが増えた形跡もある。その時期に船で働いていた女性のインタビューでは、女性も男性と同等に仕事ができることを証明しようとしたという動機も語られる。1970年代は1891年設立の海上技術学校に初めて女性が入学した時期でもあり、教育を通して、船の仕事の中でもエンジニアや無線手、航海士、船長など、より高位で報酬の良いポストにも女性が進出していった。一方で、フェミニズム運動は都市や大学のもので、女性にもホワイトカラーの職を奨めており、地方の現状を反映していないと距離をおく傾向も同時に見られた。

さらに興味深いのは、インタビューや非公式の会話から著者が感じ取った、抗いがたい海の呼び声である。とくに20世紀以降、障害が多くても女性が海に出ようとした根本的な理由は海への愛であり、海に出ることで得られる自由や誇りなのではないか。これは近世の女性の記録に出てくる「外の漁」を好む傾向にも通じる。船上の社会はたしかに男性支配的で、トイレやシャワーなどの設備の不備からハラスメント、ポルノ問題まで少数派の性として働くことから生じるさまざまな問題があった。それでも海の仕事は「男でも女でも、誰にでもできることではない」という感覚があり、そこで働くことに陸上では得られない特別な誇りや愛着、自由を感じる女性も多かったことを、いくつものインタビューから読者も読みとることができる。男性の船長や船員との間には友情や家族のような連帯感が生まれることも多く、彼女たちへの批判や妨害は、船員ではなく陸上で生活する人々から向けられることの方が多かった。

最後の第７章は「星を見るために金を払う」と題され、1980年代以降に始まった漁獲制限政策、とくにITQ（individual transferable quota, アイスランド語 kvóti。1991年に導入された譲渡可能個別漁獲割当制度）の影響が検討される。漁獲割当が投資対象となった結果、割当を維持するための費用を支払えない地方の漁業者は消滅し、現在は男女にかぎらず、漁師全体がアイスランド社会で目に見えない存在となっているという問題提起がされる。本書にもよく登場する西部地域などで歴史的に漁を担ってきた多くの共同体が崩壊し、若者は都会へ出て行き、知識も継承されなくなった。とくに2008年の経済危機は失業者の増加を招き、漁業においても男性の求職者が増えたことで女性の締め出しにつながった。それでも何世代にもわたって蓄積された知識や経験を絶やさないため、漁獲割当制度の適用されない魚種を利用した小規模沿岸漁などを通じて、地方社会で漁業を続けていくための新しい方法が模索され続けている。

３．本書の意義：隠された歴史・ジェンダー・海事史

本書は研究書でありながら、豊富なインタビュー

や全体に散りばめられた著者自身の体験談が魅力的なエスノグラフィーでもある。個々の論点についてはより詳しく知りたいと思う箇所もあるが、全体としてアイスランドの隠された歴史を明らかにする優れた研究成果であることはまちがいない。以下では中世アイスランド史を専門とする評者が感じた本書の意義について述べていきたい。

まず、アイスランドの一般社会においても本研究の反響は大きかった。2015年から2017年にかけてレイキャヴィーク海事博物館で特別展も開催され、好意的なレビューが寄せられている[5]。2015年は1915年にアイスランドで40歳以上の女性に参政権が承認されてから100周年に当たり、特別展はその一環でもあった。担当キュレーターでウィルソンの研究協力者でもあるイーリス・グズビャルガルドッティル氏は、この企画は博物館展示のオルタナティヴとしても有効だと発言している[6]。従来の展示ではほとんど語られなかった側面を見せることで教科書や博物館で語られる歴史が全てではないことを示し、博物館展示全体をより多様な視点から見直すきっかけにもなると期待されていた。

次に、アイスランドの歴史研究における価値も大きい。ここでは中世史にかぎるが、中世アイスランド／北欧社会におけるジェンダーについては1980年代から研究が進展してきた[7]。とくに女性と海との関わりについてはジェッシュ（2001）が扱っており[8]、その内容の一部は松本（2015）も紹介した[9]。そのような研究の中でまず言及されるのは深慮のウンヌル[10]の事例である。深慮のウンヌルはアイスランドへの植民航海を主導した女性であり、サガの中では「女ひとりでこんな戦乱のさなかからこのような財産と従者をともなって脱出できたためしなどどこにもないように人びとは思った」と言及される[11]。これはウンヌルの例外的な非凡さ、女性たちの中で傑出した性質を表すものと解される。また漁業については同じく女性の植民者であるスリーズル・スンダフィッリルの例がある。彼女は北ノルウェー出身だが、その地が飢饉に見舞われたときに魔術によってフィヨルドを魚で満たしたことから、sundafyllir（字義通りには「海峡を満たす者」）と呼ばれた。アイスランドに植民した後にも西北部のイーサフィヨルドに漁場を作ったと『植民の書』で伝えられている[12]。このように、女性が航海を主導したり漁をしたりする事例はないわけではないが、あくまで例外であり、通常は男性の活動だったという解釈が一般的だった。

それに対し、本書はより豊かな女性と海との関係を示唆する。本書は主に近世以降の歴史を扱い、史料の少ない中世の実態に関して明言はしていない。それでも、上述のウンヌルやスリーズルに加え、「ギスリのサガ」に登場する女性奴隷に注目している点は興味深い。この女性ボウトヒルドゥルはボートを巧みに操り、敵の船を振り切って主人公を無事に逃した[13]。著者はこの例を女性漁師の精神的・肉体的な強さ、とくに操船技術の高さの傍証として引いているが、それにとどまらない意味も考えられる。とくにサガに関しては、そこで語られるのは上層住民の世界であり、その背景には語られていない下層の人々の暮らしがあることが指摘されている[14]。たしかに『植民の書』やサガなどの叙述史料に女性の船乗りや漁師が登場するのは希だが、記述対象の偏りを考慮すれば、中世にも使用人や奴隷の間ではむしろ女性も漁をするのが「ふつう」だったのかもしれない。

このような視点は、北欧社会における女性をめぐるより大きな議論につながる可能性もある。古ノルド語・古アイスランド語文献には「楯乙女」と呼ばれるような女性戦士が多数登場する。そのように武器を取って戦う女性が現実に存在したかについては、とくに近年人骨やDNAの分析技術が発達した結果、武器が副葬されている女性の事例が複数見つかったことで議論が活性化している。女性ヴァイキングの可能性は学界を越えて注目を集めているが[15]、本書が前近代アイスランドについて明らかにした漁における性別分業の弱さや、女性が船に乗ることへの抵抗の無さを考えると、ヴァイキング遠征に女性が参加することも生活の延長として特別なこととは考えられていなかった可能性もある。ただし、それはヴァイキング時代や中世の北欧が男女平等社会だったことを意味するわけではない。前近代アイスランドにおいても農場主とその妻のような社会上層では男女の役割分担や規範が明確に異なっており、労働に関しても織布が女性の仕事とされたように、全て

において分業がなかったわけではないため、慎重な考察が必要だろう。

また、アイスランド史にかぎらない比較可能性も考えられる。海事史は近年関心の高まっている分野だが、海や船上の社会は男性の領域という理解が一般的だと思われる。女性の役割も重要という指摘もあるが、その多くは沿岸での小規模漁業や魚の加工、売買への関わり[16]、または船に乗る夫を陸で待つ妻の役割などを扱い[17]、船上で男性と同様に働く女性についての情報は少ない。女海賊など例外的な事例に限定されているといえる[18]。そのようななかで『ヨーロッパの北の海』第11章「海に生きる女たち」は19世紀の北の海におけるジェンダーをかなり詳細に扱っている[19]。そこでは地域によってさまざまな形態があったことが指摘されているが、大まかには北海では男性が海上での仕事を担い、女性は餌付け・水産加工などの沿岸での季節労働に従事する傾向がみてとれる一方、バルト海やノルウェー北部では女性による沿岸漁業や船での移動は珍しくなく、性別による分業は北海よりも未分化だったと分析されている。ただしバルト海でも19世紀後半以降には漁業・農業の近代化が進み、中産階級的理想も浸透した結果、女性は家庭、男性は扶養者という役割分担が進んでいく。『ヨーロッパの北の海』では扱われていないが、アイスランドはバルト海やノルウェーとの共通点が多く、比較することでどのような条件が女性と海との関わりを強めるのかをより解明できるかもしれない。本書がアイスランドの女性船乗りの歴史を包括的に描き出した意義は大きいだろう。

4．課題と展望

本書は、女性の漁師・船乗りという存在を軸として前近代から現代までを記述しているため、通史的にアイスランドにおける人々の生き方の変化を描き出すことにもつながっている。19世紀後半を転換点として、ジェンダーにかかわらず生存のために必要なことはなんでもやっていた社会から、職業が分化し、賃金労働を通して人に雇用されるのが一般的な社会へアイスランドは大きく変わっていった。それと連動して海に出る女性のあり方や評価も変化したのである。時代の変化を大きな流れの中で描くことで、かつては「ふつう」だった存在が、公の歴史の中でどのように消えていくかの実例を見せている点でも貴重な成果であろう[20]。ただそのように大きな流れを見通せることが魅力である反面、ある時点での女性たちとそれぞれの社会との関係については、より議論を深めることが可能だと思われる。

たとえば、なぜ18世紀の女性は危険であるにも関わらず船上でもスカートを穿いていたのか、デンマークがズボンの着用を禁じていたのはなぜか、その中で敢えてズボンを穿いたスリーズル船長のような女性にはどういう意図や背景があったのか[21]。あるいは、1970年代にアイスランドでフェミニズム運動が盛んになったとき、その影響から漁師という「男性の職業」に関心をもった女性がいたことにも言及されているが、なぜその時代に女性漁師の歴史は掘り起こされなかったのだろうか。本書で触れられているような都市と農村のフェミニズムへの温度差に由来するのか、また別の背景があるのかなど、興味は尽きない。ただしこれらの謎の探求は、本書の成果を受け継ぐべき評者を含む学界全体の課題となるだろう。

専門分野が異なるにもかかわらず評者が本書をとりあげたいと思ったのは、自分自身も本書と出会い歴史を見る眼が変わったからである。たとえば、上述した「ギスリのサガ」のボウトヒルドゥルのくだりは評者自身も読んでいたが、そこに女性による漁の可能性が示されていることには気づかなかった。同じような気づきが、アイスランドにかぎらず、さまざまな地域・時代に関心をもつ読者の中にも生じれば幸いである。ただし本評はあくまで中世アイスランド史の立場から興味を引かれた点について述べたものである。今後異なる観点からも本書が読み解かれることを願っている。

（なお、本稿の執筆に際しては2021年８月30日に開催されたジェンダー史勉強会での報告とその後の議論から、とても有益な示唆をいただいた。主催者の八谷舞さん、中込さやかさん、ならびに当日の参加者のみなさまに厚く御礼を申し上げたい。）

注

1 The Central Bank of Iceland, *Economic Indicators 22 December 2020*, p. 12.

2 タイトルにも使われている“seawomen”という単語について本書の中で直接の説明はないが、Þórunn Magnúsdóttirによる先行研究が用いているアイスランド語“sjókonur”（字義通りには「海の女」）を著者ウィルソンが訳して使用したと思われる。

3 Margaret Elizabeth Willson, “Icelandic Fisher Women's Experience: Implications, Social Change, and Fisheries Policy”, *Ethnos* 79-4（2014）, p. 529.

4 i）heimræði（home base）：農場の近辺から船を出す／ ii）viðleguver（shared base）：漁業シーズンのみ地域農民が集合し、近隣農場に泊まって漁に従事／ iii）útver（outlying base）：主農場の管理下にあり、漁業シーズンのみ使用人を派遣／ iv）blandað ver（mixed base）：i・ii・iiiの混合。Ragnar Edvardsson, “Commercial and subsistence fishing in Vestfirðir: a study in the role of fishing in the Icelandic Medieval economy”, *Archaeologia Islandica* 4（2005）, p. 55.

5 たとえば、“From Iceland ― Women Have Always Made Waves Here: Unearthing The History of Iceland's Female Sea Workers”, *Grapevine*, 2015.6.5, https://grapevine.is/icelandic-culture/art/2015/06/05/women-have-always-made-waves-here-unearthing-the-history-of-icelands-female-sea-workers/; Eygló Svala Arnarsdóttir, “Heroines of the sea”, *Iceland Review* 54-5（2016）, pp. 78-81.

6 Karin Murray-Bergquist, “Women at Sea”, *Stúdentablaðið*, 2016.5.17, http://studentabladid.com/efni/women-at-sea

7 Jóhanna Katrín Friðriksdóttir, “Gender”, Ármann Jakobsson & Sverrir Jakobsson eds., *The Routledge Research Companion to the Medieval Icelandic Sagas*, London; New York, 2017, pp. 226-239. 基礎文献としては以下の２冊が挙げられる。Judith Jesch, *Women in the Viking Age*, Woodbridge, 1991; Jenny Jochens, *Women in Old Norse Society*, Ithaca; New York, 1998.

8 Judith Jesch, “Women and Ships in the Viking World”, *Northern Studies* 36（2001）, pp. 49-68.

9 松本涼「中世アイスランドの商業―羊毛布と女性」斯波照雄・玉木俊明編著『北海・バルト海の商業世界』悠書館、2015年、149-182頁。

10 中世アイスランドの人名については再建発音で表記することが多いが、本稿では現代の人名も登場するため、現代語発音に基づく表記に統一した。ただしdóttir「娘」を「ドウフティル」ではなく「ドッティル」とするなど簡便さを優先したものもある。

11 谷口幸男訳「ラックサー谷の人びとのサガ」４章『アイスランド サガ』新潮社、1979年、313頁。

12 『植民の書』Sturlabók 145, Hauksbók 116. Jakob Benediktsson ed., *Íslendingabók: Landnámabók*（Íslenzk fornrit I）, Reykjavík, 1968, p. 186.

13 大塚光子訳『アイスランド サガ：スールの子ギースリの物語』三省堂、1987年、108-116頁。

14 Orri Vésteinsson, “A Divided Society: Peasants and the Aristocracy in Medieval Iceland”, *Viking and Medieval Scandinavia* 3（2007）, pp. 117-139.

15 女性ヴァイキングの議論に対する社会の反応についてはJudith Jeschによる２つのブログ記事が詳しい。“Let's Debate Female Viking Warriors Yet Again”, 2017.9.9; “Some Further Discussion of the Article on Bj 581”, 2017.9.18, http://norseandviking.blogspot.com/2017/09/some-further-discussion-of-article-on.html. 議論再燃の発端となったビルカの墓跡Bj 581を含む考古学の成果については、Leszek Gardeła, *Women and Weapons in the Viking World: Amazons of the North*, Oxbow Books, 2021.

16 たとえばフィリップ・ドランジェ、高橋理監訳『ハンザ 12－17世紀』みすず書房、2016年、253頁では、スコーネのニシン取引で魚の下処理や塩漬けを女性が担っていたことが紹介される。

17 たとえば大西吉之「オランダと海――偉人・英雄から水夫と妻へ」金澤周作編『海のイギリス史――闘争と共生の世界史』昭和堂、2013年、286-290頁。

18 薩摩真介「海賊――「全人類の敵」？」『海のイギリス史』196-197頁。

19 デヴィド・カービー、メルヤ－リーサ・ヒンカネン、玉木俊明他訳『ヨーロッパの北の海――北海・バルト海の歴史』刀水書房、2011年、303-333頁。

20 Unnur Dís Skaptadóttir, “Seawomen of Iceland: survival on the edge”, *Gender, Place & Culture* 25-3（2018）, pp. 465-467.

21 内容を確認することができなかったが、ズボンと女性漁師をテーマとした講演が2020年に海事博物館で行われていることから、この点はアイスランドでも読者の興味を引いたと思われる。Hafdís Erla Hafsteinsdóttir, “Sjókonur í buxum”, Sjóminjasafnið í Reykjavík, https://borginokkar.is/vidburdir/sjokonur-i-buxum-fostudagsflettan